

# リレーションシップを高める研究

－アイスブレイクを活用して－

所属校：渋谷区立神宮前小学校

氏名：川 畑 武

派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：リレーションシップ・アイスブレイク・ファシリテーション・学び合い

## I 研究の目的

学校において「児童の学力向上」「教員の校内研究」等々、問題解決や発展に向けた組織の大切さを痛感する。組織の中で、「チーム学習」という視点は様々な場面で重要と考へ、それらの素地である「リレーションシップを高める」ための研究を行いたいと考えた。

年度末、卒業（修了）間近になって「（信頼関係の高い状態で）もう一年続けたい」「より早くよい関係（よい意味でのリラックスした雰囲気）が築けるともっといい。」というように教員同士、担任と保護者、担任と子供、子供同士といった互いの信頼関係「リレーション」が徐々に充実してくることがあった。早い段階からそうした信頼関係が高まるとより合理的かつ組織的に教育効果が上がると思った。そのための多数な方法の中から簡単に行える（紹介や還元）できるという長所があるアイスブレイクを活用したいと考えた。

## II 研究の方法

### 1 都内公立小学校への臨床実習（6月～11月）

- ・教員聞き取り、校内授業参観による児童の実態把握
- ・1年生保護者会への参加（7月、9月）
- ・道徳授業（3、5、6年生）
- ・研究協議会への参加
- ・実践の省察

### 2 研究・調査内容

#### (1) 1年生保護者会参加

2回行った。1回目は7月上旬に1年生保護者会に参加した。90分間中15分間の時間で行った。会が始まりすぐに私がアイスブレイカーとして活動を行った。「プロフィールシート」を用いてアイスブレイカーの自己開示（自己紹介）を行い別教室に移動して行った。内容は、互いに誕生日を言い合いながら丸い円を作る「バースデーチェーン」と、読んでほしい自分の名前（ニックネーム）を決めて、他の保護者の名前（ニックネーム）を声にだしてボールを投げる「ネームキャッチボール」の2つの活動を行った。担任はT2として参加した。2回目は、担任主導で「宝物あてゲーム」を行った。児童への宿題の説明も含んだ内容であり、家にある学校に持ってくることでできる宝物を互いに当てるゲーム活動である。宝物がわかるような質問を考えて（隣の人と話をして）質問

するというゲームである。会の始めの20分ほどの時間を用いて行った。

#### (2) アイスブレイクを活用した授業の実施

3、5、6年生に各1回ずつ、アイスブレイク活動を導入時に活用した道徳授業を行った。共通した授業展開となるように構成し、（授業に関連した）「アイスブレイク活動」→「問題追究的発問」→「個の意見」→「話し合い」→「グループ発表」→「ワークシート」（一般化、内省）→「説話」という流れで行った。実習担当者や学級担任への聞き取りや授業参観を行い可能な範囲で児童の実態を把握した上で学習計画を作成した。特に、「話し合い活動」を取り入れたことと、指導者の共通化のための学級担任のT2としての授業支援ということ、またアイスブレイク活動として、授業に重要な視点「多様なものの捉え方」「協力の素晴らしさ」「授業展開に関連する内容」となるように留意した。

#### (3) 見とり

リレーションシップは、「関係関連」という意味で辞書に記述されている。リレーションシップが高まった状態とはどのような状態であるのか定義づけるのはそれぞれの立場や見方において異なる。本実習では、「意見の言い易さ」「聞き方」を具体的客観的に検証するという視点を重視し事前と事後にアンケートを実施し考察した。

## III 研究の結果

### 1 アンケートの質問項目

- a 保護者会は緊張する。
- b 自分の意見や考えを発言しやすい。
- c 先生の話をよく聴いている。
- d 他の人の話をよく聴いている。
- e 他の保護者と交流する場がある。
- f 話し合いの時、自分の考えを言っている。
- g 新しく話しやすい人（知り合い）ができる。
- h 話し合いの時、友達の考えを聴いている。
- i アイスブレイクは役に立った。
- j 授業中に自分の意見を言うのは楽しい。
- k アイスブレイクに満足した。
- l 授業中に友達の考えを聴くのは楽しい。
- m 今回の保護者会に満足した。

## 2 アンケート結果

【「とてもそう思う」「そう思う」を合わせた割合 (%)】

	1年生保護者会			3年授業		5年授業		6年授業	
	活用前	活用後	活用後	前	後	前	後	前	後
a	57	35	14	—	—	—	—	—	—
b	15	65	82	71	69	40	57	85	85
c	96	100	96	59	94	77	93	73	100
d	96	100	97	71	94	90	87	88	100
e	46	90	68	—	—	—	—	—	—
f	—	—	—	88	81	90	87	85	96
g	62	35	29	—	—	—	—	—	—
h	—	—	—	88	94	83	90	81	96
i	—	70	68	—	—	—	—	—	—
j	—	—	—	65	69	57	73	81	96
k	—	65	75	—	—	—	—	—	—
l	—	—	—	65	81	73	73	77	100
m	88	100	92	—	—	—	—	—	—

## 3 アンケート分析

### ア 1年生保護者会

6項目の改善が数値的に見ることができる。特に変動が大きい項目は、a「保護者会への緊張」b「意見・発言のしやすさ」e「交流する場」である。改善が見られない項目はg「新しく話しやすい人ができる」であった。

### イ 3, 5, 6年生児童

5年生は4項目、3年生は5項目、6年生は6項目の改善が見られる。変動が大きい項目は、3年生はc「先生の話をよく聴く」d「他の人の話を聴く」l「友達の考えを聴くのが楽しい」である。5年生は、b「意見・発言のしやすさ」j「授業中に自分の意見を言うのが楽しい」c「先生の話をよく聴く」である。6年生は、c「先生の話をよく聴く」l「友達の考えを聴くのが楽しい」、h「話し合い時に友達の考えを聴く」とj「授業中に自分の意見を言うのは楽しい」(同じ変動率)である。マイナスの項目は、3年生で2項目、5年生で1項目見られ、6年生には見られない。3年生では、b「意見・発言のしやすさ」f「話し合い時に自分の意見を言っている」であり、5年生も、f「話し合い時に自分の意見を言っている」である。

## IV 考察

### 1 リレーションシップを土台とした学び合い

本研究は、緊張緩和を主軸とし行った。数値のみでの検証での効果は見られるが、参加者が初対面なのか、普段一緒に活動しているのか等、参加者の人間関係の段階や気質にもよる。授業であれば、ねらい、会議であれば方向性、ゴール等、場に則した内容とならなければ時間の無駄となる。保護者用アンケートの自由記述で「雰囲気がよく話しやすくて効果的」など肯定的な自由記述が殆どである一方で「必要ではない。本当に有効なのか分からない。」など否定的である記述が2度続けて記述

されていることから全ての参加者に万能ではない事実がわかる。「参加者の年齢、男女比、資質、人柄、所属、会場の雰囲気、天気、湿度などで千変万化する。」と専門家は指摘する。アイスブレイカーが誰であるか、参加者との関係でも変化する。保護者会において、外部者より学級担任がやる方がより効果的であると1回目を感じて2回目の保護者会では、担任主導で実施したところ、よりやわらかな雰囲気を創り出し数値的にも改善度が高くなった。このようにアイスブレイカーの人柄、知見、個性によっても効果が変わることが分かる。目的ではなく一つの手法として押さえておかなければならない。

### 2 今後のファシリテーターの重要性

文科省試算によると、10年間で全教師の3分の1が入れ替わる。ベテラン、中堅教員の果たすべき課題が産出してくる。教員同士の「リレーションシップ」「学び合い」の重要度が高まることは容易に予想できる。アイスブレイク活動をきっかけに浮かび上がってきたものは、「参加者が楽しく学ぶための場作り、学びを促進すること」「異なる立場のもの同士、良好なコミュニケーションを育みながら、共通ゴール達成に向かうこと」である。そこでファシリテーターの重要度が増すことに気付いた。その役割とは「話しやすい雰囲気をつくり、参加者の気持ちをうまく引き出し、全体のながれを把握し、最終的方向性に向かって話し合いをまとめ、全ての参加者が自分の気持ちを表現できた、自分の気持ちを受け取ってもらったという満足感とともに会場をされるような場を作ること」(早稲田大学講師 永堀宏美)である。そのために「授業」「保護者会」において、抽象的助言だけでなく、教員へ具体的に伝えることのできる一つの例示・手法として大いに役立つ。同僚との助け合いの一つの引き出しとしたい。

### 3 副次的気付き(木を見て森を見る)

実践授業・保護者会を通じリレーションシップが高まる背景は複雑である。単にアイスブレイク活動を取り入れると「リレーションシップ」が高まるという構造ではない。要因をいくつか考察分類すると

(環境) 教室、机椅子の並び方、天候、湿度(人的) 参加者構成、意欲、経験、年齢、性別、気質、教員の授業スキル(方針) 学級担任指導方針、学びの形態、学校経営方針、家庭教育方針等々があげられる。これらの「複雑さの中にひそみ変化を生じさせる構造を見抜く力」(ピーターM センゲ)が重要なことであり、難しさである。

「木も見て森も見る」力を教員は様々な方法で身につけていく必要がある。